

機関番号：13401  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2011  
 課題番号：20520494  
 研究課題名（和文）リハーサルからタスク運用に転移する正確さに影響を及ぼす要因に関する研究  
 研究課題名（英文）A Study on the Factors Influencing Accuracy Transferred From Rehearsal to Task Performance  
 研究代表者  
 伊達 正起（DATE MASAKI）  
 福井大学・教育地域科学部・准教授  
 研究者番号：30259858

研究成果の概要（和文）：学習者がリハーサルを行った後でタスクをすることで、タスクをする際の英語形式が正確になるかどうか調べた結果、以下の点が明らかになった。学習者が気づいて正しく修正した形式をその後のタスクで再使用する。一方、学習者が自分のエラーに気づくことができない場合もあり、それは学習者の熟達度に影響される。また、学習者が正しく使えると意識し実際に使用する形式と、正しく使えると意識するが実際には使用できない形式がある。

研究成果の概要（英文）：It is examined if English forms in task performance become accurate when learners perform a task after rehearsal. It is then found that after the learners noticed and corrected some erroneous forms, they reused the modified forms in task performance. However, the learners could not notice other erroneous forms, which was related to their language proficiency level. Besides, the learners are conscious of their correct use of some forms and they use the forms correctly, whereas they are conscious of their correct use of other forms but they do not use the forms correctly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：リハーサル，タスク運用，モニタリング，フィードバック，気づき，転移

1. 研究開始当初の背景

言語運用に対するプランニングにはいくつかのタイプがある。Ellis, R. (2005, Planning

and task-based performance: Theory and research. In R. Ellis (Ed.), *Planning and task performance in a second language* (pp. 37-

74). Amsterdam: John Benjamins Publishing) のまとめによると、プランニングのタイプは、プランニングのタイミング・プランニングの自身・プランニング中の時間的プレッシャー・プランニングについてのアドバイス等の条件によることがわかる。タスク前のプランニングはプランニングの1つのタイプであり、今までの研究において、タスク前のプランニングが流暢さと複雑さに対して有効であると議論されてきている。しかし、そのような研究は限られた状況で行われたものであり、その結果に対しては少なくとも以下の5つの疑問が生じる。

(1) 先行研究は、主に方略的プランニング(タスク運用時に産出する内容に関してメモをとりながらプランニングする)に焦点をあてながら、プランニングが流暢さと複雑さに影響を与え(Mehnert, U. 1998. The effects of different lengths of time for planning on second language performance. *Studies in Second Language Acquisition*, 20, 52-83.)、正確さには影響を与えない(Yuan, F., & Ellis, R. 2003. The effects of pre-task and on-line planning on fluency, complexity and accuracy in L2 monolingual oral production. *Applied Linguistics*, 24, 1-27.)と主張している。

一方、もう1つのタスク前のプランニングであるリハーサル(タスク運用時に同じことを繰り返す)が正確さに影響を与える(Lynch, T., & Maclean, J. 2001. Effects of immediate task repetition on learners performance. In M. Bygate, P. Skehan, & M. Swain (Eds.), *Researching Pedagogic Tasks: Second Language Learning, Teaching and Testing*. (pp. 141-162). Harlow: Longman) こともわかっている。タスク前のプランニングの効果を結論づけるためには、リハーサルの効果につい

てもっと調べる必要はないのか。

(2) 先行研究は、産出された文章全体における正確さ・流暢さ・複雑さを量的に測定している。Bygate, M., & Samuda, V. (2005.

*Integrative planning through the use of task-repetition*. In R. Ellis (Ed.), pp. 37-74) は、タスクの繰り返しにより1回目の情報が2回目にもどのように談話的に複雑さになるのかに焦点をあてた研究をしている。このようなプランニング時とタスク運用時の共通部に焦点をあてた質的研究が必要ではないのか。

(3) ほとんどの研究は、プランニング時とタスク運用時のモードが同じであるか、プランニング時はライティングでタスク時はスピーキングという組み合わせである。スピーキングとライティングの様々な組み合わせをプランニング時とタスク運用時にあてはめてその効果を調べる必要がないのか。

(4) 先行研究は、1回のタスクにおけるプランニング効果を計っている。Bygate, M. (2001. Effects of task repetition on the structure and control of oral language. In M. Bygate, P. Skehan, & M. Swain (Eds.), pp.

23-48) は、タスク前のプランニングを組み入れずに、同じタスクを同じ内容で与えることで現れる繰り返しの効果が同じタスクを繰り返しても内容が異なる場合には現れないことを示している。1回では現れない効果を計る、あるいは1回で偶然現れたかもしれない効果を確認するために、タスク前のプランニングを伴うタスクでも調べる必要はないのか。

(5) 先行研究では、タスク前のプランニングを学習者に任せたり、焦点をあてる箇所を教師があらかじめ指導している。そのため、プランニング時に学習者が正しいプランニングを行っているのか、特に、プランニング時の正確さの点からエラーに注意を払っているのか不明である。また、タスク運用時のエラーに

対しての教師からフォローもない。そのため、プランニングを通してエラーに気づき、訂正し、タスク運用時に正しく使用するかどうかは学習者任せになってしまっている。

DATE M. (2006. The influence of ways to trigger and enhance awareness in incidental learning of new vocabulary. *ARELE*,17, 131-140.) や DATE M. (2003. The effect of enhanced awareness on retention: A case study on new vocabulary. *ARELE*, 14, 181-190.) は、単に気づくだけではなく、教育的介入により気づきを強化する必要性を主張している。また、DATE M. (2005. Variables relating to feedback effect on repair and editing of treatable errors in writing. *ARELE*, 16, 91-100.) でも、エラーに対する外部からのフィードバックという介入の有効性を示唆している。プランニングを伴うタスク運用の正確さに対する効果を上げるためには、何らかの教育的介入を与える必要はないのか。以上の5点の疑問を解明しようと考えたのが、今回の研究の着想に至った経緯である。

## 2. 研究の目的

リハーサルとタスク運用間の共通部分に焦点をあてながら、共通部分に生じるエラーを次の3種類に分類する：(1) モニタリングによって正しく修正されたエラーが、タスク運用に転移され正しい形式で使用される場合 (2) 正しく修正されるが、タスク運用に転移されない場合 (3) モニタリングしてエラーの存在に気づかない場合。そして、正確さの転移に対して以下の4点について明らかにしようとする。

- (1) リハーサルの効果
- (2) モニタリングを伴うリハーサルの効果
- (3) モニタリングを伴うリハーサルとエ

ラーに対する教師からのフィードバックの組み合わせの効果

- (4) それぞれの効果に対する4つの要因 (学習者レベル・リハーサル時間の長さ・リハーサル時のモード・トピックの繰り返し) がもたらす影響

## 3. 研究の方法

08年度は、リハーサルとタスク運用間の共通部分に焦点をあてながら、学習者に自身が産出した英語をモニタリングさせることが正確さの転移に及ぼす影響について、以下の仮説をもとに実験を行った。

- ・リハーサルで気づいた形式のほとんどは、タスク運用で再度使用される
  - ・タスク運用で再度使用される気づいた形式の量は、いかなる要因にも影響を受けない
- そして、英会話を履修する大学1年生を流暢さの点で2つのグループに分け、あるトピックについて一人で発話するというモノログ・タスクを与えた。そして、タスク前のプランニングとして行うリハーサルとリハーサル後に行うタスク運用の2つを組み合わせた活動を14回に渡るレッスン内 (1週間に1回のレッスン) で計12回与えた。その際、「トピックの繰り返し」「リハーサル時間の長さ」「リハーサルとタスク運用のモードの組み合わせ」を考慮して14回のレッスンをデザインした。そうすることで、「学習者の熟達度」を含めた4つの要因が正確さの転移に及ぼす影響についても調べた。

09年度は、08年度同様、参加者にモノログ・タスクを使った活動を1週間に1回計12回与えた。ただし、08年度とは異なる参加者を対象として。そして、リハーサルとタスク運用間の共通部分に焦点をあて、学習者のリハーサル前に教師からエラー形式に対するフィードバックを与えることが、正

確さの転移にどのような影響を及ぼすのかについて調べた。1回の活動を、「一人の学習者の作品中のエラーに対して下線とメタ言語的説明を使った教師による形式指導→学習者がトピックについてリハーサル→学習者がセルフモニタリング→学習者が同じトピックについてタスク運用→セルフモニタリング」という流れで構成した。各活動前に指導した形式は全部で61種類に及んだ。そして、全活動後の翌週には指導したすべての形式に関するアンケート調査を行い、学習者が各形式にどれほどの知識と運用意識（急に使えるか・時間をかけると使えるか・振り返ると使えるか・使えないか）を持っているのか調べた。

10年度は、09年度に取ったデータの一部を質的に2つの観点より分析した。その際、上位グループに属する参加者を無作為に1名抽出した。まずは、リハーサル直後のモニタリングによる気づきとその後のタスク運用に及ぼす影響について調べた。さらに、リハーサル前に与えた形式指導（11週間の授業内で計61種類の形式）に焦点をあて、指導がその後の学習者が運用する英語の正確さに及ぼす影響と学習者の指導効果に対する意識について調べた。

#### 4. 研究結果

学習者がどのようにリハーサルで産出した表現をその後のタスク運用において再使用するのかという点に関しては、次の2点がわかった。

(1) リハーサルとモニタリングによって気づいて正しく修正された形式の多くは、その後のタスク運用でも正しい形式のまま再使用される。一方、リハーサルとモニタリングを与えても、学習者自身の気づきには限界があり、気づくことができない形式が多い。

(2) タスク運用時に再使用する語の多さやリハーサルとモニタリングを与えても気づかないケースに関して、リハーサルモードや、リハーサル時間の長さ・トピックの繰り返し・学習者の熟達度の影響がある。

一方、教師による形式指導を組み合わせた場合には以下の2点が明らかになった。

(1) 指導を与えても、運用能力の低い学習者の方が、リハーサル後のモニタリングにおいて自身のエラーに気づかずタスク運用時にもそのエラー形式を転移する場面が多い。また、自身の英語運用に関する意識についても、指導前だけでなく指導後もわからないとする形式が多い。

(2) 一方、運用能力の高い学習者の方が、リハーサル後のモニタリングにおいて自身のエラーに気づかなくとも、タスク運用時にはそのエラー形式自体を使用しない場面が多い。また、リハーサル時には使用しないエラー形式をタスク運用時に使用するが、直後のモニタリングにおいてエラーに気づき正しく修正する場面が多い。そして、自身の英語運用に関する意識についても、指導前から知っていたが急には運用できなかった形式が一連の活動を通じて、急に運用できるようになったとする形式が多い。

さらに、上記の参加者1名の運用した英語と意識調査結果を詳細に分析した結果、以下の点が明らかになった。

(1) モニタリングによる正しい気づきが後のタスク運用に反映される場合とされない場合がある

(2) モニタリングによる誤った気づきが後のタスク運用に反映される場合とされない場合がある

(3) モニタリングによるエラーの気づきはないがタスク運用において正確な言語使用やエラー修正がある

(4) リハーサルで正しく使用してもタスク運用において誤った言語使用やエラー修正がある

(5) 学習者が「指導前は知らなかったが、今では急に話したり書いたりする時にも正しく使える」と意識し、実際に運用するようになった形式がある

(6) 学習者が「指導前は知らなかったが、今は時間をかけると話したり書いたりする時に正しく使える」と意識し、実際に運用するようになった形式がある

(7) 学習者が「指導前は知らなかったが、今は話したり書いたりしたものをもう一度振り替えると誤りに気づき正しく直せる」と意識しているが、実際には修正できない形式がある

(8) 学習者が「指導前から知っていたが、急に話したり書いたりする時には正しく使えなかった。しかし、急に話したり書いたりする時にも正しく使える」と意識しているが、実際には運用できない形式がある

(9) 学習者が「指導前から知っていたが、急に話したり書いたりする時には正しく使えなかった。今も、時間をかけると話したり書いたりする時には正しく使える」と意識しているが、実際には急に運用する時でも正しく使用できるようになった形式がある

普段の授業において、学習者によるタスクの繰り返しという活動は多々用いられる。しかし、学習者による気づきが生じなければ学習につながらないことは、本研究結果より、大いに示唆できる。さらに今後は、学習者に気づきを生じさせるための手立て、そして、その気づきを再使用させるための手立てについても研究する必要がある。こうした研究を進めることで、タスクの繰り返しの有効性につなげていくことになると思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 伊達 正起、学習者による気づきと理解に焦点をあてたペア・トーキング活動、中部地区英語教育学会紀要、査読有、39巻、2010、205-212
- ② 伊達 正起、タスク運用時に再使用される英語に対するリハーサルの効果、中部地区英語教育学会紀要、査読有、38巻、2009、405-412

[学会発表] (計2件)

- ① 伊達 正起、学習者の気づきを考慮したペア・トーキング活動、中部地区英語教育学会、2009. 6. 27、常葉学園大学
- ② 伊達 正起、リハーサル時の気づきがタスク運用に及ぼす影響について、中部地区英語教育学会、2008. 6. 29、清泉女学院大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊達 正起 (DATE MASAKI)

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：30259858

### (2) 研究分担者

()

研究者番号：

### (3) 連携研究者

ディラン ジョーンズ (Dylan Jones)

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：70347946